

加賀ゆびぬき作家

佐藤 満美子さん (54) 仙台市泉区

自作のゆびぬき

創作現場

私の相棒

緻密な模様を華やかに



幅1センチ、直径1・5センチほどの小さな輪状の土台に施された、緻密で美しい伝統模様。つややかな絹糸が、華やかさを生み出す。加賀ゆびぬきは、裁縫道具の域を超え、鑑賞用としてもアクセサリーとしても楽しめる伝統工芸品だ。

「絹糸の組み合わせ次第で、印象ががらりと変わる。何色

作家、佐藤満美子さん(54)は、うろこ、青海波、市松などの伝統模様のほか、タコやキャンドーなど新しい模様もデザインして制作する。

土台には、幅1・1センチの帯状に切ったはがきを使う。輪を作りバイアステープでくるみ、強度を高めるために真綿をきつく巻く。その上に、絹糸を隙間なく縫い付け、模様を完成させていく。

「出来栄が悪くて自分では、自分で作った愛用のゆびぬきだ。10年ほど前、通っていた教室で初めて市松模様に挑戦したときのものだ。」

「出来栄が悪くて自分では、自分で作った愛用のゆびぬきだ。10年ほど前、通っていた教室で初めて市松模様に挑戦したときのものだ。」

を使うか、選ぶときに一番心が躍る」と佐藤さん。常時100色以上をそろえているという。

作業中、身に着けているのが、自分で作った愛用のゆびぬきだ。10年ほど前、通っていた教室で初めて市松模様に挑戦したときのものだ。

「改めて加賀ゆびぬきと向き合い、後世に残したいと思った。この先、作家として生きるという覚悟と自覚ができた」と振り返る。



2007年、市内で偶然見つけた教室で魅力を知り、約10年通った。転機は18年。友人に連れられて訪れた宮城県利府町の起業支援施設で、販売へのアドバイスを受けた。

仙台すずめ踊りをモチーフにしたオリジナル作品「スズメ」は、仙台に住む自分ならではの模様を追求した結果生まれた自信作だ。

仙台すずめ踊りをモチーフにしたオリジナル作品「スズメ」は、仙台に住む自分ならではの模様を追求した結果生まれた自信作だ。

メ モ 加賀ゆびぬきは、金沢市を中心に加賀友禅の着物を仕立てていた女性たちが、残り糸で自作したのが始まりとされる。旧家

では、ひな人形の装飾にも使われていた。佐藤さんの作品は「編み物カフェ ウブントウ」(仙台市太白区)などで購入できる。